

# 二重被爆事件は 終わっていない

正寿  
山下

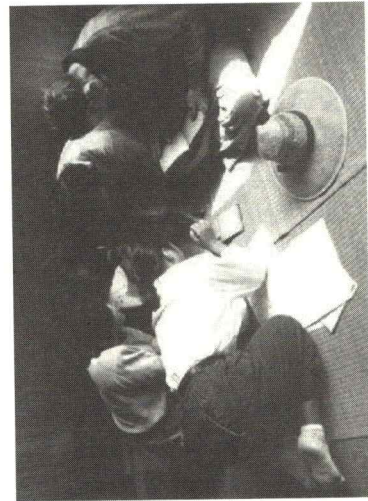
## 1 核実験被災船を追跡する高校生たち

高知県西南部・幡多郡に、1983年の夏、公立高校9校を結ぶ自主的サークル「幡多高校生ゼミナール」（幡多ゼミ）が結成され、地域の現代史調査にとりくんだ。1985年、高校生たちは、ビキニ事件の社会的背景、水爆実験と放射能など「知りたいから学ぶ」本物の学習を積み重ねて、後輩へと引き継いでいった。

広島・長崎に次ぐビキニの悲劇。私たち「幡多高校生ゼミナール」の調査をビキニ事件の真相解明へと導いてくれたのが、藤井馬さんと息子の節弥さんだった。馬さんは2人の子どもとともに長崎で被爆した。そのうち次男の節弥さんはマグロ船員となり、太平洋の核実験に遭遇した。1

府下であり、6月8日になってから放射能雨の測定をはじめめている。当時の沖縄では80%の人が雨水を飲み水にし、放射能雨を飲んだ疑いもある。

2004年8月、釜山でのビキニ被災船調査は、韓国では初めての調査であり、新たな発見があった。ビキニ事件で日本のマグロ漁船はマーシャル諸島の危険な海域を避け、ビキニ環礁の南に位置しているサモア諸島周辺のマグロ船団から離れたため、マグロの水揚げも減少した。その穴埋めをするかのように、韓国のマグロ漁船がサモアでの操業にのりだしている。韓国漁船のサモアでの操業開始は、1



聞き取り調査をする高校生

958年。アメリカがビキニ・エニウエトク・ジョンストン環礁で「ハード・タック作戦」（34回）をおこなった、もつとも核実験が集中した年だった。

「学び、調査し、表現する」活動は、幡多地域から室戸、東京（第五福竜丸）、焼津、広島、長崎、沖縄、韓国へと「平和の旅」を軸に広がり、歌・紙芝

960年8月2日、彼は神奈川県久里浜病院を抜け出し入水し、27歳の命を絶った。

高校生たちは、第五福竜丸の無線長だった久保山愛吉さんの奥さんのすずさんに会うことができた。焼津も第五福竜丸だけが被災船ではなかったのだ。この船だけにスポットがあてられたことが不幸であった。他の被災船員からねたみがおこる原因をつくってしまった。第五福竜丸の船員が語りたがらなかつたのもそのためだ。しかし、彼らには、「被爆者手帳」さえ支給されておらず、久保山愛吉さんは「水爆実験の最初の犠牲者」であった。

すずさんは、愛吉さんの形見でもあるバラを、丹精こめて咲かせつづけ、さし木にして、翌年、焼津の3・1ビキニデーに参加したゼミ顧問に手渡してくれた。

1989年8月、高校生たちは、長崎で開かれた第16回全国高校生平和集会への参加と、二重被爆者・藤井節弥さんの母校である淵中学校訪問のあと、沖縄に渡って、はじめての沖縄ビキニ事件調査を開始した。

沖縄のマグロ漁船・銀嶺丸と大鵬丸は1954年、那覇港でアメリカ軍の放射能検査を受けたが、結果は知らされなかつた。銀嶺丸と大鵬丸の乗組員68人が確認され、そのうちの17人が40歳代半ばから50歳代で死亡していた。死因は、ガンがもつとも多くて11人であった。

また、水爆実験当時、本土では5月中旬から下旬にかけて、記録的に高い放射能雨が検知されたが、沖縄は米軍政

居・合唱構成詩・本・VTR、そしてドキュメンタリー映画「ビキニの海は忘れない」など、社会に向けて澗刺とした意見表明を続け、2011年に第2回「焼津平和賞」を受賞した。

その後も福島原発事故の被災に向き合い、福島の高中生との交流を続けてきたが、学校多忙化で一時期、停滞した。しかし、核兵器禁止条約の国際的な活動に応じて、活動を再開し、再びビキニ事件の調査が始まった。

横山さんは14歳で長崎三菱の工場で被爆、生き地獄を経験し、広島を通過して土佐清水に帰った。戦後はビキニで被爆したいわば二重被爆者である。

8月には全国高校生平和集会に参加し、ビキニ核被災を報告した後、セミパラチンスクの留学生と懇談し、幡多ゼミが高知に招待し交流した。それらのシーンは録画され、学習教材「核被災と核兵器禁止条約」として、DVD編集（英・韓・露語訳）された。

日本の高校生・青年の選挙投票率の低さは、政治・社会的停滞の原因となるほど、極めて深刻である。日本の青年運動も、管理的・対策的傾向が強く、教育的・主体的支援が課題となっている。「地域から世界とつながる」活動が、青年の革新的成長のためにも希求されている。

（太平洋核被災支援センター・ビキニ核被災検証会事務局）

<http://bikini-kakuhisai.jet55.com>